

Going Public ！

社外取締役・はまなす財団理事長

濱田 康行

2015年10月15日

みんなで居酒屋 (Pub…Public House) に飲みに行こう！という意味ではない。これは由緒ある英国証券界で使われている言葉。その意味するところは、私会社 (Private Company) が公会社 (Public Company) になることだ。私会社とは、誰かが会社を始めた時の状況を思い起こせばよい。社長になる人が何から何まで支出し設立した、まさにマイカンパニーだ。公会社とは、私会社が成長して、多くの人々から資金を集められるようになった状態。両者の間には大きな河がある。それを渡ることを IPO (Initial Public Offering) という。日本ではこれを株式公開と訳しているが、正確には、私会社を卒業しようとして広く人々から資金を集める、その最初の一回目 (Initial) を言う。

要するに、誰かが勝手に始めた会社が、公的存在、社会的な存在になる、その過程をゴーイング・パブリックと呼ぶのである。

公的・社会的になるということは責任のあり方が違ってくる。私会社なら失敗しても自分の財産を失うだけ (せいぜい親兄弟だ)。しかし公的会社は多くの人に迷惑がかかる。会社を経営することの責任が質的に違ってくる。この違いを Going Public という言葉は響かせている。もう子供じゃない。大人になるんだ、それなりの責任がある。

日本では会社の公的責任という認識がやや甘い。東芝事件などをみているとそう思う。内輪もめは私会社のやることだ。

借金は返す必要があるが、株式で集めたお金は返さなくてよい。これは最悪の誤解で、英国人が聞いたら驚くだろう。形式的にはそうかもしれない。

返さなくていいのは個人に対してであり、公的会社は社会に負債を負っているのだ。社会に会社として貢献するという役割を担う代わりに個人レベルの債務から解放されている。そう考えればよい。私社会よりもずっと責任は重い。IPO で成金になって舞い上がる、などという次元の低いことでは困る。返済する必要のないお金が懐に入って狂喜する。見当違いもはなはだしい！

証券市場・株式市場は資本主義の最大の発明である。そこには人々の知恵と品格が刻み込まれている。これを大事にしないと資本主義は危機に陥る。

資本主義は一見、自分さえ良ければよい、そういう利己主義の体制に見える。しかし、それだけではなかった。そこには常に上を目指す創造性と倫理があった。Going Public は上を目指すことで、上には、そこにとどまるだけの品格が必要なのだ。やはり、この言葉をつくった国は資本主義の母国だし紳士の国なのである。